

To 不定詞の本質 (その1)

——歴史・比較的观点より——

杉 浦 茂 夫

0. はじめに

本論文の端緒となったのは、次の2つの記述である。

- (1) In cases where other languages use a plain infinitive as the subject, object or nominal predicate of a sentence, English use either an infinitive with *to* or a gerund.

(Zandvoort 1975⁷, p. 4)

- (2) But gradually an enormous extension of the application of this *to*-infinitive has taken place : the meaning of the preposition has been weakened and in some cases totally extinguished, so that now the *to*-infinitive must be considered the normal English infinitive, the naked infinitive being reserved for comparatively few employments, which are the solitary survivals of the old use of the infinitive. This development is not confined to English : we find it more or less in all the Gothonic languages, though with this preposition only in the West Gothonic branch (G. *zu*, Dutch *te*), A somewhat parallel development has taken place in Fr., cp “ces fruits sont bons *à manger*” | “apprendre *à danser*” (while in other cases a different preposition is used : “il est facile *de voir* cela”).

(Jespersen, 1954, III, pp. 10f.)

以上2つの引用文が示唆していることは、英語の *to* 不定詞の特性が、他言語の不定詞の用法と比較することによって、より明確にされうるのではないかということであろう。さらに、英語だけに対象を限っても、「方向」を表わす前置詞の *to* と、不定詞の *to* とはどんな関係にあるのかという問題がある。現代英語話者の直観から言えば、両者は全く別個のものであるということになるが、歴史的には同一のものということになる。引用文(2)の前半からも明らかなように、「方向」の意味が弱くないし消滅して、不定詞標識の *to* となったのである。このことから予想されることは、現代英語における *to* 不定詞の用法がすべて OE において存在していたわけではないということ¹⁾で、この点については、*OED* により後で検証しようと思う。

0. 1 用語の統一

引用文(1)では *a plain infinitive* という用語が、(2)では *the naked infinitive* という用語が用いられていた。Jespersen は、他の個所では、*bare infinitive* という用語も用いている。各種の文法辞典や、たとえば、小野・中尾 (1980, p. 419) には、その他の用語が紹介されているが、本稿では、原形不定詞、*to* 不定詞という用語を用い、両者を合わせて不定詞と呼ぶことにしたい。

1. 現代英語の *to* 不定詞

本章では、2, 3のための準備段階として、現代英語における *to* 不定詞の用法を整理してみようと思う。しかし、*to* 不定詞の場合、用法の整理といっても、容易なことではない。そのことは、次の言葉からも明らかである。

1) 本稿は、OE の資料に直接当って、そこから不定詞の用法について考察を導き出そうと意図するものではない。各種の研究書によって、英語史の講義に利用できる説明の原理を求めようとする試みであると理解して頂きたい。

The uses of English infinitives are so manifold, and there is so much overlapping among them, that I have experienced considerable difficulty in classifying them and in fitting each quotation and example into the appropriate pigeonhole.

(Jespersen, 1954, V. p. 151)

Jespersen は上のように述べた後で、「すぐれた英文法書の不定詞の説明部分を調べてみたが、その分類もまた不満足なもので、少しほっとした」と告白しているのである。

本稿では、原則として、*OED* の To の項に挙げられた分類枠を利用し、なるだけ平易な用例を用いることにする。それは、**2**で歴史的な概観を試みる際には、*OED* の初出例を参考にせざるをえないこと、**3**でドイツ語、フランス語に訳出する際に困難を生じないようにすること、を考慮してのことである。²⁾なお、用例については、原則として、*OED* の用例の中で現代英語期に属するものの中から最も平易なものを選び、適当なものが見い出せない場合は、Jespersen (1954, V, p. 150～p. 277) の中から該当する用例を選び、それには(J)と付記し、あわせて同書のページを記すことにした。

OED の To の項のうち、「不定詞の前の to」についての分類は、ローマ数字による大分類枠で5項目、アラビア数字による下位分類枠で22項目に及んでいる。さらに、Iでは、*, **, …のように、*の数による意味分類が5項目ある。以下では、いわゆる「不定詞付き対格構文」などを含むIV、「分離不定詞」や「代不定詞」など特殊構文を含むVは、対象外として、上記の方針に従って用例を整理することにした。IVを対象外としたことには、問題があるかもしれないが、複雑になるのを避けるために本稿では一応考慮外としたことをお断りしておきたい。

2) 筆者としては、個人的には、Jespersen の ranks に基づく分類により共感を覚えている。しかし、Jespersen の分類枠と *OED* のそれとの間に、一対一の対応関係を求めることは不可能であると思う。

I. 副詞的關係にある不定詞とともに

*目的あるいは意図を示す

1. 動詞・形容詞・名詞に依存して

She ran to meet her father.

Are they quite good to eat?

The time to learn is when you're young.

2. 絶対・独立構文において

All their ins and outs (to use an American phrase)

**目的性 (objectivity) を示す

3. 動詞に依存して, 弱い目的の意味をもつ

I strive to be concise.

4. 形容詞に依存して, その形容詞の適用範囲を示す

I am ready to go.

5. 抽象名詞に依存して, その目的や適用範囲を示す

I had the honour to be a member of it.

***取り決め (appointment) あるいは用途 (destination) を示す

6. 運命 (destiny) あるいは出来事や成り行き (outcome) を示す

When we two parted... to sever for years.

****結果を示す。

7. 結果・成り行き (consequence) を表わす

This tea is too hot to drink.

*****根拠 (occasion) あるいは条件を示す

8. 根拠を示して

I am glad to see you here. (J. p. 259)

9. 受動的に (主要名詞が含意される目的語となる)

You are a fair woman to look upon.

(現代綴字に改変)

10. 主節の陳述の根拠となる事実・想定を表わす

To hear you, people might think you were the mistress. (J. p. 262)

II. 形容詞関係にある不定詞とともに

11. be 動詞の述部として、あるいは直接名詞を修飾して、名詞に対して形容詞的關係にある不定詞とともに。(この項の下位区分は複雑である。a. 意図・取り決め, b. 義務・必要, c. 可能性・起こりうる行為, d. 性質・特徴と意味区分され、さらに、不定詞の態や前置詞の有無によって下位区分されている。ここでは、いわゆる「be-to 構文」は省き、名詞を直接修飾する用例のみを示す。)

I have much to tell. (a)

I have a song to sing. (b)

There is no one to see us. (c)

She was not the woman to misbehave towards her betters. (d)

12. 直説法の関係節に等価な不定詞とともに

He was the last to appear.

III. 名詞的關係にある不定詞とともに

名詞または動名詞と等価である: to は、結局、自らの意味はもたずに不定詞の単なる「印」となっている。

13. it に導かれて、主語・目的語となっている不定詞とともに

'Tis better to have loved and lost Than never to have loved at all.

直接の主語・述語となっている不定詞とともに

To err is human, to forgive, divine.

Talking is not always to converse.

14. 他動詞の直接目的語となっている不定詞とともに。

He fear'd to die, yet felt ashamed to live.

She wants to speak to you.

以上で、OED からの引用を終るが、OED の分類枠の妥当性については一言

しておかねばならない。

- (1) *OED* の、I 副詞的、II 形容詞的、III 名詞的という関係からの大分類が、意味によるものか、機能によるものか、判然としない。たとえば、1 の最後の例や 5 は名詞にかかるのであるから、機能からすれば形容詞的ということになろう。5 については、Jespersen (1954, V, pp.266ff.) が、The Infinitive of Specification という項を設けて、名詞、形容詞、動詞にかかるものをすべて包括して論じていることを指摘しておかねばならない。
- (2) 分類とその説明のしかたに、恣意的な、首尾一貫性を欠くと思われる点がある。たとえば、11d と 12 の相違はどこから生じているのか客観的な説明が欲しいところである。不定詞の態や遡及性に関する説明は、不定詞の用法全般に関わることであると思うが、*OED* では、11のみで詳しく論じられている。
- (3) その結果、他の学者の分類と著しく食い違う点が出てくる。たとえば、enough や too の後で用いられる to 不定詞は、*OED* では Result を表わすとされるが、Jespersen(1954, V.) では Specification の項に入れられている。(Jespersen は、Result という項を別に設定しているのである。)

このような疑問点を念頭に置きながら、以下の論考を進めたいと思う。また、「初出例」に関する疑念についても、Serjeantson (1968, p. 10) の警告に留意しなければならない。

... it must be emphasized that the 'first recorded use' of a word, especially in the earlier periods, does not necessarily imply 'first use', (a) because a word may be in current use for some time before it appears in any written document, and (b) because obviously many words may have been recorded for the first time in documents no longer extant.

2. to 不定詞の歴史的考察

2. 1 2つの問題

OE の不定詞には次の2種類があった。¹⁾

単純不定詞 -an (ME, -en, -e)

与格不定詞 { -anne
 -enne (ME, -ene, -en, -e)

この与格不定詞は、常に、to に先行されていた。もともと、与格不定詞の前の to は、ふつうの名詞の前に用いられる to と同じ意味・用法——不定詞によって表わされる行為・状態に向って動き、方向、傾向、目的を表わす²⁾——を持っていた。しかし、時が経つにつれて、この前置詞の明白な意味が弱まり、一般化されて、単なる不定詞の標識となってしまった。さらに、上に示した語尾も、Mod. E では失われ、動詞の他の形と区別がなくなり、直説法現在形（3人称単数を除く）、仮定法現在、命令法と同じ形になってしまった。

以上の記述から、極めて素朴に考えて、次の2つの点が問題として浮んでくる。

- (1) 前置詞 to の意味が徐々に弱化していったのであるとすれば、to の本来の意味を保っている不定詞の使用の方が古いはずである。不定詞用法のうち、どのような意味が古く、どのような意味が新しい発達であるかを探究することにより、言語変化の様相の一面を明らかにしうるのではないか。
- (2) 英語では、不定詞を形の上だけで動詞の他の活用形式から区別すること

1) この節の記述は、主として、*OED* の To の項による。同じことは、英語史を扱った多くの書物にも見い出される。

2) ... it expressed motion, direction, inclination, purpose, etc., toward the act or condition expressed by the infinitive ; ..

はできない。ところが、ドイツ語やフランス語では、不定詞が独自の形式を保っている。だから、これらの諸語での不定詞の用法を探究することで、英語の古い時代の不定詞の姿を浮かび上らせる可能性があるのではないか。また、英語だけに限っても、to 不定詞の発達の背後には、不定詞を独自の活用形式で標示できないという事実があるのではないか。

本稿では、(1)の問題を **2. 2** で、(2)の問題を **2. 3** と **3** で採り上げることにしたい。

2. 2 第1仮説とその検証

前節で提起した2つの問題のうち、(1)を「前置詞 to の原義に近い意味をもつ to 不定詞の方が古い」という仮説（以下「第1仮説」）とし、この仮説をいくつかの資料によって検証してみよう。

2. 2. 1 OED

もっとも簡単な方法は、*OED* の初出例の年に当てることで、そのために **1** で *OED* による分類枠を紹介したのであった。しかし、先に指摘した種々の限界の他にも 難点があって、事はそう簡単ではないと思う。たとえば、主語、目的語という概念は、OE では Mod. E におけるように確立されてはおらず、ある to 不定詞の用例をめぐって、それが主語、あるいは目的語と解釈できるかどうかに関して問題が生じてくるのである。主語に関しては、Jespersen (1954, V, p. 162), 小野・中尾 (1980, p. 424) などに、目的語に関しては、Jespersen (p. 170), 小野・中尾 (pp. 425f., p. 432) などにその例がある。以上のような事情をすべて念頭に置きながら、*OED* による to 不定詞の初出例を整理してみると次のようになる。（以下の表の数字は、**1** で紹介した *OED* の分類枠のもの。数字の後につけた説明は、**1** の記述の一部で、いちいち **1** を参照する煩雑さを避けるために付したもの。）

次頁の表から、次の2点は明らかである。

(1) すくなくとも I（副詞的關係）に関する限りは、第1仮説は支持されて

大分類	OE 期に出現	ME 期に出現	Mod. E 期に出現
I (副詞的)	1. (目的) 3. (弱い目的) 4. (形容詞の適用範囲) 5. (名詞の目的, 適用範囲) 9. (根拠, 受動的)	2. (目的, 絶対構文) 6. (運命, 成り行き) 7. (結果) 8. (根拠) 10. (陳述の根拠)	
II (形容詞的)		³⁾ 11. (形容詞的)	12. (関係節相当)
III (名詞的)	13. (it に導かれて主語・述語) 14. (他動詞の直接目的語)	15. (直接主語・述語に)	

いる。

(2) IIIの名詞的關係に関しては問題がある。

OED も述べているように、ここでは「to は自らの意味を全く持たない、単なる不定詞の「印」(sign) となっている」のである。この点については、他の資料からの検討を待たねばならない。

さらに、1の記述からは省略したが、いわゆる「不定詞付き対格構文」についての記述から、傍証として、次の事実は注目に価すると思う。この構文には、Rosenbaum (1967) が「動詞句補文」、「名詞句補文」の名で区別をした2つの類に該当する、2つの異なる種類がある。⁴⁾*OED* の記述によると、‘commanding, teaching, causing, allowing, or the like’を表す動詞の後に来る構文(Rosenbaumの動詞句補文に該当する)は、OE期に出現しているのに対して、‘saying, thinking, knowing, perceiving, or the like’を表わ

3) OEの例が散見される。

4) さらに、believeなどを含む、第三のグループを区別することができるが、ここでは触れない。

ず動詞の後に来る構文 (Rosenbaum の名詞句補文に、ほぼ、該当する) は、ME 期に出現しているのである。前者のグループの *to* の方が、*to* の原義である「方向、傾向」、さらに「指定」といった意味をより多く持っているように思われるのではないか。

上の(2)で述べたように、IIIの *to* 不定詞の用法が OE 期から存在していることは、第1仮説の反証となっている。しかし、ここで考慮しなければならないことは、(a)原形不定詞との併用、(b)他動詞にも自動詞にも用いられる動詞の後での解釈、ということであり、これらについては *OED* も触れているが、以下では、Jespersen (1954) によって考察を進めたい。

2. 2. 2 Jespersen (1954)

本書は、‘on historical principles’ と副題に銘を打ってはいるが、対象は Modern English であって、本稿で考察している主題については、散発的に言及がなされているのに過ぎない。⁷そして、「第1仮説」を支持する記述が V. pp. 157f. に展開されているが、⁸ここでは繰り返さない。⁹以下には、「名詞的關係」に関する記述に限って、V 巻の記述を紹介することにしたい。(各項目の後に、V巻のページを記す。)

- (1) OE の詩文においては、*to* 不定詞が主語あるいは目的語として用いられている例は存在しない。(p. 162)

散文においては、*to* 不定詞が主語であると感じられるようになる統語的認識の転移が生じた。たとえば、次の文で *hit* は主語で、*to secganne* は、‘in respect of speaking’ を意味していて、主語ではない。

hit is ungeliefedlic to secganne (= *lit. it is incredible to speak*)

しかし、類似構文の多くで認識の転移が生じて (Jespersen はこれを「異分析」(metanalysis) と呼ぶ)、¹⁰ *to* 不定詞が徐々に主語だと感じられるようになった。そして、次の文では、*to* 不定詞が主語となったことは疑いない。

him leofre wære wið hiene to feohtanne (=lit. to him more pleasant would be with him to fight. i.e. to fight with him would be more pleasant to him.) (pp. 162f.)

- (2) 動詞の目的語となった不定詞を伴う構文は、いくつかの事例において、方向を表わす to の用法に由来するものかもしれない。(p. 192)

Jespersen の説明のうち、主語に関するものは、「第1仮説」を支持する方向にあると思う。しかし、目的語となった場合についての説明は、いささか歯切れが悪いと思わざるをえない。それで、OE の文法書に当たってみることにしたい。

2. 2. 3 Sweet (1953)

OE の文法書のなかで、Wright and Wright (1923) は、Phonology と Accidence のみを扱っていて、to 不定詞の用法には言及していない。Brook (1955) と、Sweet (1953) には言及があるが、後者の方が詳しいので、ここではそれを紹介したい。to 不定詞の用法は、次の4つであるという。(pp. 55f.)

- (1) 目的を表わす
- (2) 「始める、止める、禁じる、教える」のような、いくつかの動詞の意味を補足する。(それらの動詞には、原形不定詞が伴うこともある)
- (3) 形容詞の指示を限定・決定する
- (4) 必然性・適合性を表わす

上の(2)が動詞の目的語となる場合であるが、現代英語におけるように「動作の対象」という理解ではなくて、「動詞の意味の補足」である点が重要であると思う。そこには、「方向」という to の原義が明らかに感じられるからである。これで、2. 2. 1 で示した OED からの資料のうち、「第1仮説」の反証となりそうな名詞的関係の例についても、反証とはならないことが判

明したと思うのである。

2. 3 第2仮説とその検証

2. 1 で2つの問題を提出したが、第2の問題——現代英語では不定詞を形の上だけで動詞の他の活用形式から区別できないことから生じる諸問題に移りたい。OE では違った語形をもっていた原形不定詞と to 不定詞が同じ語形をもつようになり、また直説法現在形（3人称単数を除く）や命令法などとも同じ語形をもつようになる過程で、to 不定詞の用法が原形不定詞の領域へ侵入するという形で拡大していったことの背後には、to を不定詞の標識として要求するという力が働いたに相違ないと考えられる。そこで、第2の仮説として、「言語には明確な範疇標識を要求する力が作用する」と考えて、この仮説を3つの観点から探究してみよう。

- (1) 原形不定詞と to 不定詞
- (2) for to
- (3) 受動不定詞と邇及的不定詞

2. 3. 1 原形不定詞と to 不定詞

OE では、いわば無標の (unmarked) 形であった原形不定詞が、OE 後期から増大した to 不定詞の使用のためにその地位を奪われ、現代英語では、有標の (marked) 形となってしまった過程については、多くの言及があり、ここで紙幅を費すことは避けようと思う。そしてその背後に、‘the need of some mark to distinguish the infinitive from other parts of the verb and from the cognate substantive’ があったとする *OED* (s. v. To) の記述を紹介すれば、to 不定詞の発達に「第2の仮説」の線に添った発達であることを証するのに十分であろう。なお、この過程については、次の3つの書物を対照されることをお勧めしたい。

小野・中尾 (1980) p. 419～p. 431

中尾俊夫 (1972) p. 280～p. 294, p. 305～p. 314

荒木・宇賀治 (1984) p. 445～p. 448

2. 3. 2 for to

「目的」という概念を強めるために、for to という形が用いられたのは、ME 期であった（詳細な時期については、Ono (1965, p. 262) に引用された Mustanoja の記述を参照のこと）。この for to の使用から衰微への事情は、次の段階を経たと説明される。⁵⁾

- (1) 本来「目的」を表わしていた to 不定詞が、さまざまな意味を表すようになるにつれて、to が本来の力を失ってきた。
- (2) 「目的」の意味を強めるために、それ自体も「目的」を表わす for を添えて用いるようになった。
- (3) for to は、「目的」の意を強める用法が本来であったが、弱まって単なる不定詞標識となり、to の自由変異形として用いられるようになる。（13世紀）
- (4) 14世紀になると衰え始め、減少傾向は、個々の作家や写字生により変化はあるが、15世紀にも続く。
- (5) 今日では、方言や卑俗語にのみ残る。⁶⁾

以上の5段階の中、(2)において「第2仮説」が働いていたと考えられるが、現代英語の in order to という表現の存在も併せて考える必要があると思う。⁷⁾ In order to が(3)の段階にまで進んで、単なる不定詞標識となることは今のところ考えられないと思うが、for が前置詞であるのに対して、in order は名詞を含む前置詞句であるということも、(3)の段階への発達を左右する要因として考えられるのではないかということを指摘しておきたい。

5) Ono (1965), 小野 茂 (1981) による。通説に対する小野教授の批判については、同教授の論考を参照されたい。

6) この項は、Jespersen (1954, V, p. 212) による。

7) Jespersen 上掲書 p. 249. この表現の初出例は OED によれば1711年である。

2. 3. 3 受動不定詞と遡及的不定詞

不定詞は、「有史以前の時代においては、完全な屈折をもった動詞の名詞⁸⁾ (verbal substantive) であった」。名詞であれば、態には中立的であって、その事情は現代英語の次の例からも明らかである。

the enemy's *destruction* of the city

the city's *destruction* by the enemy

上の *destruction* は「破壊すること」、下は「破壊されること」である。このことから当然の帰結として、不定詞は能動的な意味にも、受動的な意味にも用いられることができるということになり、現にその用法は多い。そして、to+be+過去分詞 という形の上でも受動態になっている不定詞の用法は比較的新しく、かつ周辺の用法ということになる。「第2仮説」から言えば、「受動という意味範疇は、明確な受動態という形式を要求する」はずであるから、この点では、「第2仮説」とは反対の力が作用したことになる。Jespersen は、形式上は能動態であるのに、意味の上では受動である不定詞を「遡及的不定詞」(retroactive inf.) と呼び、「受動不定詞」と対比させている。以下に彼の所論のうち本稿の趣旨から見て興味深い点を簡単に紹介してみようと思う。(ほとんどV巻からの引用であるので、括弧内にそのページを示す。V巻以外からの場合は、巻数とページを示す。)

- (1) 英文法には「合理化傾向 (rationalizing tendency)」が観察され、その結果、他の言語で 'er liess sie *töten*', 'il la fit *tuer*' (イタリアク体杉浦。いづれも不定詞) と表現するところを, 'he let her *be killed*, caused her *to be killed*' (イタリアク体杉浦) と言うほうが、母国語話者の言語直観にとっては、より論理的であるように思える。しかし、完全な首尾一貫性は達成できなかった。(p. 221)
- (2) 他動詞不定詞が、概念上目的語であるものを後から指示する構文は OE から見られる。ウルガタ聖書の 'Herodes quaerat puerum ad pendendum

8) Jespersen (1954, III, p. 216 及び V, p. 150)

eum' (*lit.*=H. seeks child to destroy him.) は、OE では 'H. secð pætcild to forspillene' (*lit.*=H. seeks that child to destroy' と翻訳されている。(p. 222)

(ラテン語に堪能なお二人の意見では、上のラテン語で、puerum と eum が別の人物を指示している可能性も残るとのことであるが、Jespersen の説明は、同一人物を指示するという読みに基づいていることは明らかである。)

(3) 遡及的不定詞と受動不定詞の間には複雑なパラドックスが見られる。

(a) 'she did what there was to do' から、there を省くと、'what was to be done'⁹⁾ とする必要がある。(p. 228)

(b) 'there was no time to lose' と 'there was no time to be lost' は、實際上同じ意味であるが、'there was nothing to see there (nothing worth seeing)' と 'there was nothing to be seen there (nothing that could be seen, nothing visible)' の間には意味の区別がある。(p. 229)

(4) 「目的」を表わす三次語 (tertiary) として用いられた不定詞も、遡及的不定詞となることがある。

Had he bought them to put there? (p. 252)

(5) 「指定」(specification) の不定詞が、遡及的に用いられることが多い。
there was something ready to eat. (p. 270)

しかし、興味深いことに、今ならば遡及的不定詞のほうが普通であるような場合に、受動不定詞が見いだされる。受動不定詞は15世紀から18世紀にかけて、今よりも一般的であった。

Money was so hard to be got there. (Swift) (p. 271)

(6) 本節の主題である2つの不定詞構文を含む類似構文の全体像を明らかにするためには、話し手の角度、聞き手の角度という2つの違った角度から眺める必要がある。

自分の思想を表現したいと思う話し手は同一の観念を表わすためのさま

9) 後者の表現では、be+to が助動詞と感じられ、be done が主動詞であって不定詞とは感じられないため、遡及力を失ったと考えられる。

ざまな表現法の間で選択をしなければならない。

- (a) To deceive him is easy.

(目的語を伴う不定詞が、文の主語)

- (b) It is easy to deceive him.

(予備の it を用い、不定詞は外位置に)

- (c) He is easy to deceive.

(視点が移動して、人物が主語になる。He は deceive の目的語でもある)

- (d) He is easy to be deceived.

(He は受動不定詞の主語となる)

- (e) He is easily deceived.

(定形動詞が受動態で、形容詞が副詞に)

- (f) He is easily to be deceived.

(d と e の、論理的な混成形であるが、ごちない言い方) (p.272)

一方、述べられたことを理解したいと願う聞き手は、不定詞に先行する語(群)を、不定詞によって表現される観念の概念上の、主語ととるか、目的語ととるか、を決めねばならない。

- (a) there was no time to take tickets.

- (b) there was no time to wait there.

- (c) there was no time to be lost.

- (d) there was no time to lose.

この4つの文のうち、(a), (b), (c)が(d)と対立していることはすぐに理解できる。(a)は不定詞自体が目的語を伴っている。(b)は自動詞、(c)は受動不定詞である。これに対して、(d)は目的語を使わず、従って先行語を概念上の目的語とすると自然に理解される他動詞である。(pp.275f.)

以上の6項目を「第2仮説」の観点から検討してみると、(1)は仮説を支持し

ているが、(5)は明らかに逆行している。(6)の話し手の角度からの説明は、現在では談話分析の観点からもっと説得力のある説明が可能であると思うが、紙幅の都合で、触れないでおく。) (5)に関してここで問題にしたいのは次のことである。遡及的不定詞の方が受動不定詞より好まれるのは、「不定詞が（他の動詞的名詞と同様）能動、受動の区別に中立的であった」¹⁰⁾という歴史的な理由に加えて、「形がより簡単である」という、いわば「経済の原則」が働いたためではないか。そして、「経済の原則」が働くためには、「正しい理解の妨げにならない限り」という但し書きが必要であると思われるが、その但し書きは、上の(6)の聞き手の立場の説明の中に存在していると考えられるのである。つまり、その但し書きは一般的に言えば、「環境から直観的に正しい理解が得られる限り」ということで、この場合に則して言えば、「不定詞が目的語を伴わない他動詞である」ということが、遡及不定詞の使用の支えとなっていると考えられるのである。もちろん、事はこの一つの但し書きで片づけられるほど簡単ではない。たとえば、there was no time to lose と、there was no time to eat を区別するには、「他動詞」というだけでは不十分で、選択制限などによらねばならないのである。

Jespersen (1954, III, p. 219) には、「今日では、受動不定詞は、たいていの場合、能動形ほど自然ではないように思われる」という記述がある。現代英語の *genius* は、受動不定詞を避ける方向にあると思われるが、その背後には上のパラグラフで論じたような事情があることを銘記しておかねばならない¹¹⁾。

2. 4 本章のまとめ

本章では、2つの仮説により、to 不定詞の歴史的考察を試みた。第1の仮

10) Jespersen (1954, II, p. 395)

11) さらに、現代英語では、Baker (1989) のいう 'a missing noun-phrase' を含む構文が他にも多く存在するという事実も考慮されねばならない。そのような構文として、同書が挙げているのは、関係節、分裂文、比較構文、（直接・間接）疑問文、easy 構文、自由関係節、受動句、目的節などである。

説は、多くの言語事実にあてはまり、一見例外と見えるものも、OE の統語論の特殊性を考慮すれば例外ではなくなることを見た。第2の仮説は、to 不定詞の用法の発達や、for to の使用にはあてはまるが、邇及的不定詞の使用と受動不定詞を避ける傾向を説明するには、他の原則が必要であることを見た。次章では、視点を、ドイツ語とフランス語に広げて、不定詞の本質を探究したい。

(1990年 8月)

参 考 書 一 覧

- 荒木一雄・宇賀治正明. 1984. 『英語史ⅢA』(英語学大系 10) 大修館書店
- Baker, C. L., 1989, *English Syntax*. The MIT Press.
- Brook, G. L. 1955. *An Introduction to Old English*. Manchester Univ. Pr.
- Jespersen, O. 1954. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. 7 vols. George Allen & Unwin.
- 中尾俊夫. 1972. 『英語史Ⅱ』(英語学大系 9) 大修館書店
- Ono, S. 1965. The Infinitive with *for to* in Early Middle English. (『中島文雄教授還暦記念論文集』p. 262-p. 269) 研究社.
- 小野 茂. 1981. 『フィロロジーへの道』研究社.
- 小野 茂・中尾俊夫. 1980. 『英語史 I』(英語学大系 8) 大修館書店
- Rosenbaum, P. S. 1967. *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. The MIT Press.
- Serjeantson, M. S. 1935. *A History of Foreign Words in English*. Routledge & Kegan Paul.
- Sweet, H. 1953. *Sweet's Anglo-Saxon Primer*, (Rev. Norman Davis). Oxford Univ. Press.
- Wright, J. & E. M. Wright. 1923. *An Elementary Old English Grammar*. Oxford Univ. Press.
- Zandvoort, R. W. 1975. *A Handbook of English Grammar*. Longman. Rpt., 丸善.

参 考 辞 書

- Hall, J. R. C. 1984. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. Univ. of Toronto Pr.
- Murray, J. A. H. et al. 1933. *The Oxford English Dictionary*. 13 vols. [OED]